

コロナと共にデジタル変革を

大原 翔

コロナ禍の中で、企業はテレワーク、学校はオン・ライン授業と大きな変化がでてきています。従前の対面でのやり方に比べてプラス・マイナス両面あるでしょう。コロナ禍が去った後も仕事や学習においてオン・ラインでの実施が減るにしてもなくなることはないと思われます。自宅に居ながら、仕事ができることや、授業を受けられるという利点もあります。

各種セミナーや講演会もZOOMと言われるオン・ラインが盛況です。当初は戸惑いもありましたが、徐々に多くの人々が慣れてきたようです。会場の確保や準備などの作業の必要がなく、以前のセミナーに比べて労力も経費も軽減されたのではと感じられます。ところが、ある主催者に先日、聞いてみたところ、必ずしもそうでもないようです。

先日、日口間のフォーラムを視聴する機会がありました。モスクワおよび東京からそれぞれ数人のスピーカーが発言するもので、日本語・ロシア語の通訳も用意されていました。モスクワから出席者がいる場合、時差を考慮して、モスクワの午前10時(日本時間16時)開始となることが多いようです。

ロシア人のスピーカーが発言している時、同時通訳のように、画面の下に日本語字幕がでてきました。これはすごい、最近話題のAI、自動機械翻訳なのかとかつてに理解しておりました。

あとで主催者に確かめたところ、そうではありませんでした。曰く、海外とのオン・ラインでは、通信状態がかならずしも安定していない。講演会の途中で中断となる危惧があるので、その対策を念のため実施しているとのことでした。つまり、講演者がパワーポイント等に沿い発表する場合、事前にその発表を録画し、発言内容の翻訳を外国映画の字幕のように映像画面に貼りつけておき当日、再生する方法をとっていたと聞きました。質疑応答の部分のみはオン・ラインに

よるライブで実施されていました。

この種のセミナーや講演会の開始の際、主催者が日本とモスクワのスピーカーに通信状況を確認したり、視聴者が技術的な質問をしたり、予定していた開始時間が遅れることが少なくないようです。質疑応答においても質問と回答のあいだには、対面の場合と異なる「間」ができてしまい、間髪をいれずという訳にはゆかないようです。オン・ラインシステムの技術的な改善も速いスピードでなされている由ですし、それを使用する視聴者自身も習熟するにつれ、違和感は少なくなってくるのだらうと思います。

機械自動翻訳の技術の発展もここ数年は著しいと聞きます。以前、言語の文法に沿った機械翻訳技術から、ビッグデータを活用した自動翻訳に開発は移行しており、翻訳の精度も急速に進歩しているとのこと。この技術の開発により、今後、外国語教育にも大きな変革をもたらすのではないかと想像しています。また精度が十分ではありませんが、日本の公的機関NICT(情報通信研究機構)が、無料でVoiceTraという機械翻訳を公開しています。ご関心あれば以下のWEBをご覧ください。<https://voicetra.nict.go.jp/>

コロナ禍で、国内の行政組織のデジタル化の遅れが問題視されました。行政組織のみならず、従前より、ロシア人からも、日本全体のデジタル化の遅れが指摘されてきたことでした。科学技術の発展した日本なのに、何故デジタル化がこんなに遅れているのかと苦情を、訪日したロシア人から何度となく聞かされていました。遅まきながら、デジタル化の促進を新内閣は進めると打ち出しており、期待するところです。もっとも筆者自身は、アナログから脱却できていないことを、最後にこっそり、告白しておきます。